

第十三回 『あいらず』 講話テキスト3

● 『野の花を注意して見なさい・空の鳥をよく見なさい』

二〇一〇年一〇月二〇日〜二一日

於・関西セミナーハウス

第十三回 『あごらの集い』 講話テキスト4.

● 「人間の居場所」

二〇一〇年一〇月一〇日～一一日

於・関西セミナーハウス

野の花を注意して見なさい。空の鳥をよくみなさい。

人々はイエスの教えに「びっくりぎょうてんした」と、マルコ福音書は次のように記している。

「イエスは安息日（の礼拝のため）会堂に入り、教え始められた。すると、人々は、イエスの教えにびっくりぎょうてんしどうしだった。なぜなら、イエスは律法（聖書）の先生たちのようではなく、權威ある者のように教えつけられたからである。」（マルコによる福音書一章二二節）

人々がイエスの教えの何に「びっくりぎょうてん」したのか。それは「イエスが權威ある者のように教えられたからである」。

当時律法（聖書）の先生方の教えは、律法（聖書）の文字を即神の言葉（文字）とし、その文字が教え命ずることを遵守することが、神に従うこと、神の祝福を得る唯一の生き方だと人々に教えていた。

しかし、イエスは神のはたらきが、どの人のもとにもあり、神の愛と恵みに誰もがあずかって生きていることに気づきなさい。とその業と力ある言葉で人々に証示なされたので

ある。つまり、イエスは律法（聖書）の文字から出發する信仰を説いたのではなく、神のはたらきを、業と言葉で人々に直接証示したのである。この出来事に人々は「びっくりきようてんした」のである。そして、そのイエスの様子を「律法の先生のようにではなく、權威ある者のように教えられた」と言った。この人々の言葉には、当時、神殿体制を中心に祭司たちが行う儀式と律法主義的、且つ原理主義的教えの形骸化（けいがい）に対する人々（民衆）の痛烈な批判が秘められていることは充分に察せられる。つまり人々は、自らの命の芯（こゝろ）にふれる教えを祭司達に求めていたのである。そのような状況で彼らはイエスの言動にそれを感得した。

たしかに、このようなイエスに接した人々が「びっくりきようてんした」であろうことは、今日、真摯（まじ）に求道する人は、我が思いと重なり、彼らの思いが「わかる！、わかる！」と共感なきるのではないだろうか。

それにしても、ここで大切なことは、「權威ある者のように」教えられたという、その「權威」とはこの場合なにを意味しているのか、ということである。これについては先の項で述べたとおり「何にも縛られず、且つ限定されず、大いなる命の開け（自然）に生きている」状態を含んでいると解釈できる。したがって、その状態は「超越的、靈的、天的な力」であり、厳密な意味での「天の然らしめ、且つ、成らしめる天然自然のはたらき」

そのことを証示している。

☆ 「「權威」エクスーシアーという新約聖書の用法について「ギリシャ語新約聖書釈義事典」は、多くの用例を紹介しているが、見出しの訳語として、力、全權、權威、自由、權利、權能、支配等を記している」

さらに、人々が、イエスの教えに「びっくりぎょうてん」したことは、身近な日常性に於ける自然の風土の直中（生活の現場）に同時的に起こっている空に飛ぶ鳥や大地に咲く花に目を向け、**「ほら！、ほら！、ごらんなさい」**と語りかけながら、そこに神のはたらかの証示があることに気づきなさい。と促されたことである。

食うこと、着ること、これらは日々の生活で、自分が配慮しなくてはならないことである。しかし、身体や命そのものは、配慮する以前に、与えられ、生きるように有らしめられているのであり、その不思議で有り難い恵みのはたらきに気づきなさい、とイエスは次のように言われた。

「だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか、何を飲もうかと、また自分の身体のことでは何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物より以上の大切なものであり、身体は衣服より以上の大切なものではないか」（マタイによる福音書第六章二五節）

だが、イエスの教えの新しき、つまり人々が「びっくりぎょうてん」したのは、先の教えに続けて語られた証示の仕方にある。

「空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父さんは、鳥を育て成長させてくださっている。あなたがたは鳥よりも優れた者ではないか。あなたがたはうち誰が思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。また、なぜ衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、よく見つめて見なさい。労することもせず、紡ぐこともしない。しかし、わたしはあなた立ちに言う、栄華を極めたソロモン王でさえ、この花の一つほどにも装っていないかった。今日生きていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなた方には、なおさらのことではないか。信仰の小さい者達よ。

だから、『何を食べようか』『何を着ようか』と言って思い悩むな。それらは皆、異邦人（目に見えない神のはたらきを知らない者達）が必死に求めるものである。あなた方の天の父さんは、これらのものがあなた方に必要であることを知っておられるのだから。だから、あなた方は神のはたらきと、その義（必ず成してくださるはたらき）を自覚することを願いなさい。そうすれば、これらすべてのものはあなたたちに付け加えられるであらう。

だから、明日のことを思い悩むな。なぜなら、明日は明日自身が思い悩んでくれる。今

日の苦しみだけで、今日はもうじゅうぶんである。(マタイによる福音書六章二六節〜三四節)

このイエスの証示について確認しておきたいことは、イエスは「何を食べようか・何を着ようか」といったことは、天の父さんは必要に応じて「与えてくださる」から「悩まなくともよいのだ」と、言っておられるのではない。もし、そのようにこのイエスの言葉を受けるなら、それは歪んだ自我から発した単なる欲望充足信仰にすぎない。

イエスが提示なさることは、むしろその反対のことであって、「そのようなことに思い悩む暇があれば、自分に命と身体とを与え、生きるようにして下さっている天の父さんのご慈愛と恵みのはたらきの事実に気づきなさい。その命に気づくなら、食べることや着る事などには、自ずから対応してゆけるようになるのだ」と言われるのである。そのことの証示が「まず、神のはたらきと、その義(貫徹力)とを求め(開眼)なさい。そうすればこれらのものはみな付け加えられるであろう」と言うことである。

さて、以上のように、人々がイエスの教えに「びっくりぎょうてん」したのは、伝承としての律法の文字や講釈とその遵守などによる神の証示ではなく、人々の日常で共に生きて在る鳥や花や草等の存在自体が証示している神の大きいなる命のはたらきそのコトだった

のである。しかも、その大いなる命のはたらき、滾りそのコトを「あなた方の父ちゃん」と呼ばれた。「父ちゃんは、悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる。」（マタイ五章四五節）　このようなイエスの語りは人々の全身に滲み込み、生きる勇氣と希望と安心を得たのである。ちなみに、「びっくりぎょうてん」エクプレッソとは、あざとい 呆然自失させる、あざとい 啞然となる、感動し心を打たれる、などと釈義事典には訳されている。

そして、神（父ちゃん）のはたらきについて、イエスが証示なされた、極めつきとも言うべき一つは、マルコが記す次のことばである。

「イエスは言われた。神のはたらきは次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出し成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに（自然に）実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである（マルコによる福音書四章二六節〜二九節）

何と明快な語り、証示であることか。一切の理屈ぬきに、神（大いなる命）のはたらき



と、人間が何者であり、その限界について、そして、神と人との関係について、さらに、「自然」とは何か、ということについて、その有り難き奥義が、大地に蒔かれた「一粒の種」の日常的な自然の営みの出来事に於いて見事に証示されているではないか。

神のはたらきの世界は、イエスが証示されたように、人間にとっては、「夜昼、寝起きしているうちに」つまり、人間の一切の配慮を越えた正に超越的な絶対他者的な命のたぎり、はたらきそのコトなのである。その意味で神の命のはたらき、たぎりそのコトは非閉鎖的で未完結的な開けであり、虚空ぶくうそのコトだと言える。誰もその前では、ただ黙るだけである。

それにもかかわらず、人はその神を、文字や言葉の理屈で、完結的に語り知り得るとする。そして神を、その文字や言葉で閉鎖してしまふ。これは、実証主義的な科学の情報言語の世界では可能だが、「宗教」までもが、「教典や聖典」を即神の文字、神的情報の言語とし、それに基づいて教義を仕立て揚げ、真理だ！と主張する。それは歪んだ自我の醜い産物であろう。イエスは「見える！」と言ふところにあなたの罪は残る」とハリサイの祭司のセンセイ方に、ズバリといわれ、「むしろ見えない者であるという自覚をおもちであったならよかったのに！。ああ残念なことよ！」と、嘆かれた。そこには真の平安はない。(ヨハネによる福音書、九章四一節)

「文字（律法遵守）は人を殺しますが靈は生かします」と言ったパウロは「文字ではなく靈に仕える資格を与えられた」と語る。（コリントⅡ、三章六節）

また、パウロは、「私達は、見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは一ときですが、見えないものは永遠に存続するからです。」とも言つ。（コリントⅡ、四章一八節）

ということとは、「律法の文字」を「見えるもの」。一方「靈（大いなる命のはたらき）」を「見えないもの（言語を越えているもの）」とパウロは言っている。

そして、私が先に述べた「非閉鎖的とか未完結性」とは、言うならば「見えない靈的な命の無限の開け」であり、「閉鎖的とか完結的」とは見えない靈的世界を言語で包み込み限定し、それを完結体として決めつけることである。（聖書文字絶対主義の問題の一つ）

さらに、これを、「歪んだ自我」と「真つ当な自我」という観点から述べるなら、「歪んだ自我で物事を捕らえることが文字化、言葉化すること、即ち物事を閉鎖的、完結的に限定してしまうことであり、一方「真つ当な自我で物事を捕らえることとは、見えない大いなる命の世界（神の世界）は文字化も言語化もできない、非閉鎖的、未完結な限定不可能な靈的なはたらきであることを自覚している自我のことだと言える。

イエスは神を語ったのではなく、神を証示したのである。「証」とは「しるし、あかしさとする」という意味をもつ。「示」とは「しめす、しらす、つげる」とも読む。と、するなら「証示」とは、「さとりしめす」ことであり、「しるしをつげる」ということである

しかし、伝統的なキリスト教は、イエスは神を語ったとする。その語りの書が「聖書」であり、したがって「聖書は神の唯一の言葉」だとし、キリスト教会はそれを「信じる」ことをもって信仰とする。また、イエス・キリストを神の御独り子として、そのイエス・キリストの業と言葉を直接神の言葉と信じ、そのイエス・キリストに特別に選ばれ宣教のために遣わされた弟子を「使徒」（アポストロス）と称し、彼らが語った言葉も神の言葉として受け取り、それらを一冊にまとめた書物を「新約聖書」（唯一絶対の神の新しい契約の書）と信じて、キリスト教の根本正典とした。☆（この学びは、聖書論について語る場ではない）

とにかく、イエスは神を語ったのではなく、神を証示したお方であることを確認しておきたい。したがって、聖書も本来、神を証示しているもので、神を直接語っている情報言語ではなく表現言語なのだ。表現言語は信じるものではなく、その表現の根源を経験し自己覚領解しなければならぬ。つまり、そこで証示されているそれを、領得（悟って自分の

ものにする(こと) することである。そ意味で、言語で神を語るなら、その神は言語で限定された歪んだ自我が作った幻想の神、虚構の神、はりぼての神となる。神は言語を超えて無限の開け、つまり非閉鎖的で未完結的な無限の開け、命のたぎりそのコトだからである。その意味では神は「無・虚空<sup>むこくう</sup>」であるとしか言えない。否、「無・虚空」と言った瞬間、すでに「無・虚空」という言葉の観念で神を限定し閉鎖し完結させてしまっているのだ。だからこそ「スッカラカン ノ スッカラカン」と、せめてもという思いで遠慮しながら、私は言うのである。

要するに、「真実そのもと、その実体化・概念化とは別」であるという自覚が、特に神を論ずるとき必要である。この自覚に至った使徒・パウロは「ああ、なんと深遠なることよ！神の豊かさと知恵と知識は。だれが神の定めを究め尽くし、神の道を理解しつくせようか」と感嘆した。まさに徹底した自我超越の告白である。(ロマ・一一章三三節)

しかし、神を証示したイエスは、「よくよく見なさい」「注意して見なさい」と語られ、「耳ある者は聴きなさい」と、人々や祭司等に促された。これはいったい、イエスのどのような証示なのだろうか。

ある人(ケン・ウイルバー)がその書物(意識のスペクトル)で、人には三つの目があ

る、それは、「肉の目」・「理知の目」・「般若の目」<sup>はんじゃ</sup>だと言っている。これは特に新しいことではなく、新約聖書テサロニケの信徒への手紙でパウロは述べている。

「どうか、平和の神御自身が、あなた方を全く聖なる者（成熟した自我の持ち主）としてくださいますように。また、あなた方の靈も魂も体も何一つ欠けたところのない者として守り（失わないように）……あなた方をお招きになった方（神）は、真実で、必ずそのとおりにしてくださいます。（テサロニケの信徒への手紙Ⅰ、五章二三・二四節）」

ここで注目したいのは、「あなた方の靈も魂も体も何一つ欠けたところのない者として守って……」ということ、即ちここでパウロは、本来の人間、真っ当な自我意識を持った人間は（先のケン・ウィルバーの「目」という表現を用い重ね合わせていうなら）「体（肉体目）・魂（理知の目）・靈（般若の目）を欠けることなく「はたらかせ」ている者である、と言うことになる。

☆ 「般若（ハンニャ）とは、仏教に於いて、悟りを体得するときに現れてくる真実の智慧（存在のすべてを全体的に把握するようになる智慧）。

真っ当な自我がどのようにして現成してくるのかというと、肉体に於いてだけででもな

く、魂に於いてだけでもなく、靈だけに於いてでもない。大切なことは「それらの働きが、何一つ欠けることなく、相互内在において一つとなつてはたらくように守られていることを自覚するそこに、真つ当な自我は自ずと現成してくるのである。

その意味で、「真つ当な自我意識」とは、本来的な人間の意識の在り方このとであつてそれは、創造に於ける人間の自然なのである。つまり、人間が肉体と魂（知・情・意）だけに価値と根拠とを置き、それでもつて現実を合理的に生きて行こうとするなら、必ず行き詰まりに突き当たる。つまり、その生き方、在り方は最後に人間を自己破滅へ導く。これは、ヨーロッパに於いて宗教改革の精神を歪め忘れ、ただ、人間理性を万能として、合理主義的精神をもって突き進んで来た歴史的結果は、混乱と、争いと、不安。あげくの果ては地球規模の自然破壊、人心破壊をもたらしたことは現実問題として我々の身边を取り巻いていることは周知のとおりである。

「真つ当な自我意識の復権」は理想でもなく、理念でもない。人間が本来の人間に再生する為の「靈性」の回復なのである。肉体と魂（知・情・意）だけに生の価値と根拠とをおく歪んだ自我意識に生きる人間の様態は極めて不自然なのである。人間の創造に於ける自然の様態とは、肉体と魂（知・情・意）に加えて「靈性」に開眼するところに現成する

のである。ここにこそ人間性の復権が成る。

イエスは、神を語ったのではなく、神を証示なさった方である、と先に言ったが、それはほかでもなく、真つ当な人間の復権であり、それは同時に「靈性」への覚醒かくせを歪ゆがんだ自我（人間）への促し、賦与いふとよなきる言動であつたと言える。

イエスが「空の鳥をよく見なさい。」「野の花を注意して見なさい」と言うとき、まずそれらの動態、つまり全体の命のたぎり、命のはたらきの姿そのコトを、鳥の場合は「完全に見抜け」であり、野の花の場合は「こころの目で悟れ」ということに通じる言葉が用いられている。

人がものを見る場合、世界内存在者として、しかも、自我意識を持つ個人的存在としてそのものを全体的に把握はよくし見ることは出来ない。常にそれを対象化して自我の主観で認識し判断し価値付けをしてしまう。その意味で、如何なる人の判断であっても「絶対に正しい」という判断は出来ないし、無いのだ。イエスは祭司等宗教の先生の信仰を見て「偽善者ども！」と言われたが「偽善」とは「内のこと、靈のことを、外のことにはすりかえてしまふ、見せかけのこと」である。（新約聖書ギリシャ語辞典―織田 昭）

つまり、「見えない世界」を見える世界にすり替えて「私は見える」と、真剣に思い込んでいる歪んだ自我から発する、それをイエスは「偽善」と言われた。そのような信仰は所詮は自我が造る幻想であり虚構にすぎない。

だからこそイエスは、「飛ぶ鳥を完全に見抜け」と言い「野の花をこころの目で悟れ」と言われた。では一体、飛ぶ鳥を完全に見抜く、野の花をこころの目で悟る、とはどういうことなのだろうか。

イエスの教えの新しさは、先にも述べたが、律法（聖書）の文字の権威に根拠をおくのではなく、大いなる神のはたらき（神の支配）そのコトを直接に証示し、その神のはたらきを、身近に飛び交う鳥や大地で風にそよぐ野の花、つまり「自然」に見抜き、こころで悟られ、その命を提示なさったのである。だからこそ人々は「びっくりぎょうてん、呆然自失」し「これは新しい教えだ！」と感嘆した。

「自然」のフュシスというギリシャ語は「おのずと生まれ、育ち、衰え、死んでゆく」という根源的な在り方のことだと研究者は言う。つまり、他律的な人為が加わっていないみずからの内に生成、発展の可能性を常に持つ生命的な自然が、古代ギリシャの自然であった。そして、その自然は、「自ら然るもの」として仏教に於ける親鸞の「自然法爾（じ



ねんほうに)」に通じると言われている。(比較思想・東西の自然観・伊藤俊太郎。E  
学史・木田元)

キリスト教においては「自然」は、人間とは別に、人間の為に創造され、人間の消費の対象物、支配の対象物、従って研究の対象物とされるような自然観が生じるようになり、当然の事としてそのような自然観から自然科学が起こって来たのである。その結果、自然に於ける「おのずからの命の不思議を悟り観る」などということは、キリスト教信仰、特に聖書の文字(言葉)を唯一神の言葉と絶対視するプロテスタント信仰に於いては、異端的であり、反聖書的な悪魔的信仰として拒否される。

しかし、イエスは、鳥や花や、植物の種の成長の自ずから成る自然のあるがままの、神のはたらきの反映を悟り見抜き人々に証示なされた。そのイエスの語りに人々は律法の講釈では得られない感動と共感とを生きる命の根柢(霊)で観た。それは、人間は自然の外に在るのではなく自然の一部として自然と共生しているからである。

その意味で、人間だけが自然の外に存在して、自然を支配し消費の対象物であるかのよう思う人間中心主義の在り方の誤りを厳しく問われているのが現代状況である。

さらに人間中心主義の保証としてキリスト教は旧約聖書の創造の神話を根拠として、人間の優位性を説くが、イエスは野の草花と人間との間に存在の根抵の大いなる命のはたき、たぎりを同じように悟り見抜かれ、それらを「よく見なさい・注意して見なさい」と霊の目の開眼を促された。

そのイエスの促しに見事に応え、大いなる命を詩った人がいた。

花は黙って咲き 黙って散ってゆく、

そして再び枝にはもどらない。

けれども、その一時一処にこの世のすべてを託している。

一輪の花の声であり、一枝の花の真である。

永遠にほろびぬ命が 悔いなく そこに輝いている。

(花一輪―柴山全慶―)

## 人間の居場所

イエスは野に咲く花、空に飛び交う鳥等、自然に生きるものたちの様態の内に、神の隠れた大いなる命のはたらきを観て悟りなさい、と促し証示なされた。

その意味で、神の前に自明の場所、つまり、神の大いなる命をそのまま反映し得て無心に生きる場、存在の場を得ているのは植物や動物や物体一般である。かれらは、初めから自らの存在の大いなる命の場に居る。言い換えると、かれらは初めから安心しておられる命の場で、無心に、また、それ自身として天然自然をしているのである。

しかし、人間（私達）は神の前に自明の居場所などもってはいない。それを一口で言えば、人間は常に「迷いはなしの存在」なのである。

イエスが「思い悩むな」と言われたが、この思い悩む、つまり思いが分散する、あれこれと考え、心があればこれと分かれるということ、それが迷いであるが、「もう、迷うことはありませんよ！」ということが「思い悩むな」というイエスの提示である。

しかし、先述のとおり、人間は常に迷うのである。石や植物、動物のように自明の場を

得てはいない存在、つまり、人間は、自分自身の存在（生きること）に配慮しつつづける考える動物なのである。それは人間は自我意識を持っているからである。ここに人間と他の存在者（物）との差異性がある。即ち、ここに人間の特徴があり、それが人間のしるしであるといえる。

そのような人間の迷いの姿を語っている物語が新約聖書に記されている。

ヘロデ王は、自分の兄弟フィリポの妻ヘロディアと結婚しており、その事で人をやってヨハネを捕らえさせ、牢につないでいた。ヨハネが「自分の兄弟の妻と結婚することは、律法でゆるされていない」とヘロデに言ったからである。そこで、ヘロディアはヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、できないでいた。なぜなら、ヘロテ王がヨハネは正しい聖なる人であることを知って、彼を保護してやまず、またその教えを聞いて非常に悩みながらも、なお喜んで耳を傾けていたからである。

ところが、良い機会が訪れた。ヘロデ王が、自分の誕生日の祝いに高官や将校、ガリラヤ地方の有力者などを招いて宴会を催すと、ヘロディアの娘が入ってきて踊りをおどり、ヘロデ王とその客を大層喜ばせた、そこで王は少女に「欲しいものがあれば何でも言いなさい」と言い、更に「お前が願うなら、この国の半分でもやろう」と固く誓った。

少女が座を外して、母親（ヘロディア）に、「何を願いましうか」と言うと、母親は「洗礼者ヨハネの首を」と言った。早速、少女は大急ぎで王のところに行き、「今すぐに洗礼者ヨハネの首を盆に載せて、いただきとうございます」と願った。ヘロデ王は非常に心を痛めたが、誓ったことではあるし、また客の手前、少女の願いを退けたくなかった。そこで、ヘロデ王は刑吏を遣わし、ヨハネの首を持って来るように命じた。刑吏は出てゆき、牢の中でヨハネの首を斬った。そして、盆に載せて持ってきて少女に渡し、少女はそれを母親に渡した。

ヨハネの弟子たちはこの事を聞き、やってくる、遺体を引き取り、墓に納めた。」

（マルコによる福音書六章一四節〜二九節）

この出来事には、とても悲哀を感じる。何にたいして悲哀を感じるのだろうか。人間についてである。ここに登場するヘロテ王、ヘロディア、娘（少女）の行いもさることながら、人間とはここまでやるか！、という自分を含めた人間存在の悲哀である。

ひよとすると、自分がヘロデであり、ヘロディアであり、少女（娘）であっても、不思議ではないと思う。否、まさに人間の誰もがヘロデであり、ヘロディアであり、娘なのであり、煩惱に生きる者なのである。

ここで焦点をヘロデ王にしぼって見ると、彼は「ヨハネは正しい聖なる人であることを知って彼を保護し、その教えを聞いて非常に悩みながらも、なお喜んで耳を傾けていた」「非常に悩む」とは、どのように対処対応をしてよいのか、途方にくれる」という意味である。

つまり、ヘロデは自分の居場所を失ってしまったのである。

だが、ヘロデは結果的には、我欲と我執の世界に引きずり込まれてしまった。そして自らの身体と心を苦の世界に沈めることになったのである。これを先に述べた「肉の目」「魂（知、情、意）の目」「霊の目」という立場から見るとき、ヘロデは「肉の目」に囚われ「魂の目」を歪め「霊の目」に盲目となることによって、歪んだ自我のみに生きる者と化したのである。それは、彼自ら安心を捨てて、不安の中へ心身を置き、一生ヨハネの幻覚に脅え悩むことになる。（マルコ六章一六節）

これは、ヘロデだけの事ではない。見えるこの世のものだけに価値を置き、その見えるものだけに、知恵をその価値追求の道具として用い、我欲の充足に自己の人生を賭けるなら、そのような我執（人間中心主義）の在り方は、いよいよもって、人を不安に陥れ、自我充足の為に互いに奪い合い、傷つけ合い、憎しみと殺戮とを生むだけの世界となる。事

実これは現実の社会や世界の状況として、地球―深海に、山々に―に、果ては大気圏外にまでその欲望の手を延ばし、一方、身体の奥深く（遺伝子操作）に迄および、人間の欲望は止まることを知らない。このような自我中心主義（人間中心主義）は、地球を食いつくし、今や地球圏外にまでその我の手を延ばし、最後に自分自身と共に一切を破壊し消滅に向かわせている。これが、歪んだ自我の実態である。

結局、歪んだ自我意識とは、本来の自然性（あるがまま）から逸脱し歪んだ不自然な在り方だと言える。即ち、創造に於ける人間の自然からの脱落、人間性の疎外をもたらす以外のなものでもない。

イエスは証示なされた。「あなたがたの天の父さんが完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」と。（マタイによる福音書五章四八節）

ここで言われる「完全」とは、道徳的に完成された人間という意味ではなく、本来の命の全体性が歪みなく現前している常態のことである。言うならば「あるがまま、が、あるがままに現前している」状態のことである。そのような働きの場そのコトが神である。だからイエスは、「天の父さんが完全であられるように……」と証示された。

ここで再び、テサロニケの信徒への手紙でパウロが語る言葉に目を向けてみよう。

「どうか平安の神ご自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊と魂も身体も何一つ欠けたところのないものとして守り、イエス・キリストが来られるとき、非のうちどころがないものとしてくださいますように。あなた方をお招きになった方は、真実で必ずそのとおりにしてくださいませ。」

イエスは人間の理想像を提示なさったのではない。人間が人間として幸いに生きてゆく当たり前の、つまり、そうでなければ、人間が人間として存在し、互いに幸いに生きてゆくことができない故に、あたりまえの生きかた、在り方、創造に於ける人間の自然を、イエスは自らの言動で証示なさっただけのことである。その意味で、イエスは特別なことを語り、行じられたのではない。

イエスが証示なされた、あたりまえの人間とは、パウロ的な言い表しで言うなら、**肉体と魂と霊とが一つと成ってはたらき現前している全体を幸いなる人間であると言える。**

「あなたがたの霊も魂も体も何一つ欠けたところのないものとして守り……」とあるが、



「なに一つ欠けたことのない」とは「構成部分が全部整っている」こと、つまり「円満具足している」ことであり、そのよな円満具足しているはたらきは、天の父さんが保護し守り、必ずそのような命のはたらきの場にあなたを置き開眼させてくださるでしょう、とパウロは自らの経験と自覚を証しているのである。

ここで、その命に開眼させるはたらきこそが、「**霊**」の働きなのである。そして、**霊の働き**とは、神のはたらき、つまり、人の内からでなく、この世の一切を超越した大いなる命のはたらきなのである。このはたらきに開眼した自我を「**真っ当な自我**」とわたしは称している。そこでの自我は自我を突き抜け超えた大いなる命に生きる**無的自我**である。

だから、パウロは先のテサロニケの信徒への手紙五章の手前で、次のように証示している。

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそキリスト・イエス（イエスが行じ、証示した大いなる命）において、神があなたかだが開眼するように望んでおられることです。霊の火を消（抑制）してはいけません。預言（教え）を軽んじてはいけません。すべてを吟味（自覚的に知って）して、良いものを手元に

持っていないさい。あらゆる目に見えるものにまどわされないようにしなさい」(五章一六節〜二二節)

パウロは「靈の火を消してはいけません」と言う。これがすべての基本であるぞ!とパウロは提示している。そして、「いつも喜んでいなさい。絶えずいのりなさい。どんなことにも感謝しなさい。」という勧めは、靈のはたらきによって大いなる命に開眼し、自覚することによって、その者が自ずと導かれ促される結果なのであって、歪んだ自我のままで、無理に行じる事柄ではない。たとえ行じたとしても、何も得ることはなく、かえって虚無の淵に陥ち込むだけである。

先に、人間には居場所が無い、と言ったが、それは、心の真底から安心して居ることが出来る場が無い、ということ、つまり、自分が自分との関わりに於いて、他者との関わりに於いて、自然との関わりに於いて、社会との関わりに於いて、世界との関わりに於いて、地球との関わりに於いて、大宇宙との関わりに於いて、さらに、自分の死と死後との関わりに於いて、自分を超えた神との関わりに於いて、安心して自分であり得る場、それが自分の居場所という意味での「人間の居場所」のことである。はたして、あなたはそのような自分の居場所をお持ちだろうか。

ここで、確認しておきたいことがある。それは、この学びで、所謂「キリスト教人間学」を論じようとは思ってはいないし、また、それを論じるほどの教義学的知識や器量は私にはない。また、「キリスト教人間学」の知識を得ることと信仰による平安とは別である。

一人の求道者として私がイエスやパウロから我が身に証示された大いなる命の真実を、私が領解した限りに於いて受け取ったそれを、皆さまと分かち合いたいと記したのがこの冊子である。その意味でこの語りは信仰により開眼させて戴いた絶対平安の証しである。

それにしても、先に「肉体、魂、霊」という人間についてのパウロの証示を紹介したがこれは、所謂、キリスト教的人間論として「三元論」、つまり人間存在を構成する三つの独立した要素を別々に語ったのではない。そうではなく、人間存在が他の存在者との差異性について語っているのであって、人間が存在している、つまり、生きているとは、肉体として、魂として、霊として相互内在的に働いているのが人間（私）が人格として生きていることの証示であり、パウロはそのような人間の実存を自らの経験と自覚によって告白したのである。したがって、キリスト教人間学に於ける「三元論」の是非を議論する神学と大いなる命の開眼による平安とは別である。

さて、イエスが体制化したユダヤ教団の宗教権力により十字架刑で惨殺された後、怯える弟子たちの直中に、復活のイエスが立たれ、彼らに次のように言われた、という出来事がヨハネによる福音書に記されている。

「イエスは『あなたがたに平安があるように』と言われ、父（神）がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わす。と言われたから、弟子たちに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けよ！。』」（ヨハネ福音書二〇章二三節、二三節）

「聖霊」とは、聖書に於いては神の霊、つまり超越的な神（命）のはたらきを言い表している。そしてその聖霊体験は、たんに神の不思議な力を得るというのではなく、思い煩う生き方が突き破られ、言わば「あるがままでよい」という安心への開眼をもたらし得る出来事だと言える。それは、人間の居場所に開眼させるはたらきが聖霊のはたらきだと言える。

「文字（律法）は殺し、霊は活かす」とパウロは言った。（コリントⅡ、三章六節）

この場合の文字とは律法主義の生き方、つまり「このように生きなければならぬ・そのような事はしてはいけない」と、人間を精神的に縛り上げ、生き方を枠にはめ込んでしまひ、遂には人間性を疎外してしまう（殺してしまふ）ことであり一方「霊は活かす」ととは、人を活き活きさせ、安心の生き方へ発動するという意味である。

それだからこそパウロは「神のはたらきは言葉ではなく、力（デユナミス）である」と言った。（コリント人への手紙Ⅰ、四章二〇節）尚、新約聖書では「神のはたらき」と「靈のはたらき」とは同義語である。

「神のはたらきは力である」と聞くと、私達は靈的（聖靈体験）は人間を道徳的にも宗教的にも完全な人格に成らせていただけのように錯覚する。しかし、そのように思うことと自体、その者は、いまだ歪んだ自我の枠内に留まり、その場から自己の在り方、生き方を求めている極めて世俗的、且つ非宗教的、反信仰的在り方だといえる。そのような在り方は、自分に苦しみの重荷を一つ増すだけである。

パウロはローマ人への手紙二章二節で「心を新たにして自分を変えていただき……なさい。」と示しています。ここでの「心」は「理性」であり、「新たに」は「一新する」であり、さらに「変えて」とは「変貌する」と直訳できるが、このところを「理性の更新」によって、変貌せしめられよ」と有賀鉄太郎氏は訳し、ご自分の解釈を次のように提示しておられる。

「ここにメタモルホシス（モルヘー）が変わること）〔外觀とともに内面をも変容すること（松下）〕が『理性の更新』と説かれていることは、特に注目に値する点である。靈的

デユナミス(力)が人間の在り方を内面から変えてゆくことが、ここで言うメタモルホシス(更新)の意味であるが、それは理性のたんなる放棄によるのではなく、その更新によるものである。更新である限り、古いものは捨てられて、すべてが新しくされるのであればならないのであるが、古い理性(いわゆる肉の理性コロサイ二・一八)も更新された理性もその用いる推論の形式は同じである。けれども、新しい理性は人間を越えた基盤に支えられた、したがって一切の人間の前提の否定のうえに立つが新しいのである。そのような無前提の前提のもとに成り立つ論理なればこそ、その理性の論理は人間の在り方を變更させる力を持つのである。

パウロが「神の智慧」とよぶところのものは、まさにこのような実存的な性格を具えた智慧なのである。第一コリント二二章に、彼が靈の賜物(カリスマ)について語るとき、「智慧の言葉」と「知識の言葉」とを一番先に挙げていることは偶然とは言えまい。それはいずれも、靈的体験の内に照らし出されるソフィアであり、グノーシスである。言いかえるなら、それは靈的体験の力学のうちから生まれる実存的智慧である。それは「秘儀(奥義)による智慧」であって合理的・観念的思考によって論じ尽くせないものである。」(「聖靈体験の分析」―有賀鉄太郎著作集四―)

思わず有賀氏の語りに引きつけられ引証が長くなってしまったが、ここでパウロが用い

ている「理性（ヌース）」と共同約聖書では「心」と訳されていることは上記のとおりだが、この理性も心も「厳密には魂（プシユケー）の知の面の能力」であると、ギ和辞典（織田明著）にある。つまり、「魂（プシユケー）」とは人間の知・情・意のはたらき、即ち自我意識のはたらきに属することである。その意味で、上記で紹介した有賀氏が用いている「理性」を「人間の自我意識」のはたらきに置き換えて読むと、結局、有賀が問い、私達が問い、哲学や神学、さらに人間が問いつづけて来た、超越者なる神と有限者なる人間との関係を問うことになるのである。新約聖書はその神と人との関係をイエス・キリストの出来事に於いて宗教的実存的に証示していると言えよう。

しかし、新約聖書が証示しているイエスについて語る原始教会の宣教（ケリユグマ）の内容（二千年の歴史を経て構築され、正統化されて来た、その伝統的信仰の内容）が、現代の時代状況―宗教的・文化的・科学的・経済的なグローバル化の状況―のなかで、厳しくその存在意義が問いなおされ、こころあるキリスト者は、それぞれの立場と器量で苦悩している。私達も一人の求道者として伝統的なキリスト教を突き抜け―つまり単に伝統的なキリスト教を否定するのではなく―伝統的キリスト教を生み出した命の芯に開眼することで、また、伝統的なキリスト教会が置き忘れて来た未だ芽を十分に出し切っていないであろうと思われるそれ、即ちイエスが全存在で証示した、大いなる命のはたらきの普遍的

なりアリティ―に開眼させていただき、人間として互いに「それでも生きて行ける！」という存在の平安を皆さんと分かち合いたいと願っている。

話がすこし本論からそれてしまったので、先のつづきに戻ると、パウロは靈のはたらきについて次のように語っている。

「わたしは、信仰の成熟した人達の間では智慧を語ります。それはこの世の知恵ではなく、また、この世の滅び行く支配者たちの知恵でもありません。わたしは語るの隠されていた、神秘（言葉では表現出来ない）としての神の智慧であり、神が私達に栄光を与えるために、世界の始まる前から定めておられたものです。この世の支配者たちだけ一人、この智慧を理解しませんでした。わたしたちは、神が『靈』によってそのことをあきらかに示してくださいました。『靈』は一切のことを、神の深みさえも究めます。

人の内にある靈意外に、一体誰が、人のことを知るでしょうか。同じように、神の靈以外に神のこと知る者はいません。私達は世の靈ではなく、神からの靈を受けました。それでわたしたちは、神からの恵みとして与えられたものを知るようになったのです。そしてわたしたちがこれについて語るのも、人の知恵に教えられた言葉によるのではなく、『靈に教えられた言葉によっています。つまり、靈的なものによって靈的なことを説明するの



です。

魂の人(プシユキコス―歪んだ自我の人)は、神の靈に属する事柄を受け入れません。その人にとって、それは愚かなことであり、理解できないのです。靈によって初めて判断できるからです。

靈の人(プニユマテイコス―真つ当な自我の人)は一切を判断しますが、それ自身はだれからも判断されません。(コリント人への手紙I・二章六説く一五節)

結局、パウロが証示していることは何なのだろうか。それは、神(又は神のはたらき)は肉の目、知性の目、感性や意志の目のはたらきからは超越し超絶しているということ、禪的な言表で言うなら「無」であり「空」であり、私のぎりぎりの言表で言うなら「スツカラカンのスツカラカン」である。その意味である神学者が言った「神は絶対他者」(カール・バルト)であると言うのは一つの言表として納得できる。

しかし、パウロはその神、またはそのような神のはたらきは、神の智慧である靈によってのみ、その大いなる命の神のはたらきに開眼できるといっているのである。しかし、パウロの場合、その神の智慧とは、神の一人子イエス・キリストの靈によってのみとるのであるつまり、神のひとり子イエス・キリストのみが神の啓示者であり、唯一の救い主であると

いう排他的唯一絶対主義信仰に留まっている。この教理はキリスト教原始教団でその基本的信仰が生まれ、ヨーロッパに於いて五世紀頃に正統的な教理として公会議で承認決定された。そして、その教義が伝統的なキリスト教会の教義として定着し今日に至っている。しかしその排他的唯一絶対主義のキリスト教会の自己中心性が外部から厳しく問われ、他宗教との関わりの中でキリスト教会の在り方をどのように克服し、教会の真理性を保持し得るかが、教会のポストモダンの課題として、今日キリスト教は苦悩している。

この問題意識に立ってカトリック教会は現代世界に開かれた教会刷新を目指して第二ヴァティカン公会議を一九六二年から六五年にわたって開催し、二一世紀に向かって教会の在り方を中心に一六の文章を制定し、カトリック教会の方向転換に多大の影響を与えた。しかし、一方プロテスタント教会の諸派は一般的に、二一世紀への教会の在り方を十分に見い出すことができず混乱の中にいるように思われる。

それにしてもパウロが当時のユダヤ教の律法主義的信仰をイエス・キリストの贖罪信仰と復活のキリストの霊的体験によって突き抜け、ついに「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。」(ガラテヤの信徒への手紙二章二〇節)と大いなる命の開けへ自我を開

放し開眼したことの証しは、すべての人間にとって福音だといえよう。

しかし、先にも述べたとおり、パウロにとってはどこまでもイエス・キリストの贖罪と復活のキリストの命の恩恵（神の義）である。だが、それ自体はパウロが身を置いた文化的、宗教的、時代的な歴史の場での信仰告白であって、それは当然のことである。

問題は、イエスを含めたパウロの歴史的な出来事を場所と時間を越えて普遍的な唯一の真理とし、排他的にそのまま不寛容に且つ一方的に、その国の伝統や文化や宗教を悪魔的と断じて、政治力や軍事力、経済力を背景にして排除し改宗を迫ることは独断的と言われてもしかたがないと思う。これについて西谷啓治氏は「総じて歴史の事実性は、その事実であること或いは現実在であることにおいて、絶対に非通約的であり、然かも、ここで信仰の対象となるものが、そういう歴史的事実としての性格を強調された」ところにキリスト教の問題があると指摘している。その結果、キリスト教は自らのアガペー的隣人愛の契機を十分に発揮することができないようになっていて、とキリスト教を深く洞察した観点からの批判に、私も共感できるところがある。（「宗教とは何か」―西谷啓治―「現代思想とキリスト論」―芦名定道―）

この度の集いの主題は「『イエスが与える平安』への開眼を願って」ということでありしたがって、以上の学びの最後に、この主題に直接目を向けたいと思う。

新約聖書福音書に記されてあるイエスの言動を、素朴に見るかぎり、イエスが立っていた根柢・根柢はつまるところ目に見える歴史的な伝統や宗教や主義主張では無く、厳密な意味での「天然自然」であったと言える。その点でパウロは未だ律法主義を引きずっていたと言える。

マタイ福音書は、イエスの言葉をまとめ「山上の教え」として第五章から第七章に一括収録した。そして、その冒頭にイエスが語られた教えとして掲げたのが次の言葉である。

「こころの貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである」(共同訳)

「幸いなるかな、こころの貧しき者、天国はその人のものなり」(文語訳)

— マタイ五章三節 —

私はイエスの証示は、この一言で尽きるのではないかと思っている。すべてはここから

始まり、ここで尽きる。イエスのわずか三年間の宣教の生涯の言動は、この一言の内容の具体化ではなかったかと思う。勿論、イエスが与えた平安の秘儀もこのひと言に隠されており、人間の居場所もここに示されているのではないだろうか。このイエスの証示を皆さんと分かち合うことで、この度の学びの結論としたい。

山上の教えでイエスが証示なされたことは、道徳や倫理ではない。又キリスト者の生き方や在り方でもない。つまり、人間の単なる究極的な在り方としての倫理を説かれたのではないというのである。そのように山上の教えをうけとるなら、それは歪んだ自我が生み出す観念論的理想主義であり、理想主義的幻想である。その結果は絶望と虚無の闇に陥ち込むことになる。

私たちは、イエスの言葉を聞くとき、その言葉が何処から出て来たのか、その根源と根拠とに気づくことが大切であり、それに気づくことなくイエスの言葉を聞くことは、人間性を歪めてしまい、偽善と虚無にその者を陥没させる。

「幸いだ！、こころの空っぽの人は、神のはたらきはその人のもの」とイエスが語られるとき、イエス自身神のはたらき、即ち、大いなる創造的な命のたぎり、そのものとして

その大いなる命のたぎりを証示しておられるのである。

ではその大いなる創造的な命のたぎり、とは何か、そしてそれは何処から来るのかと問うたフアリサイの教師達にイエスは「神のはたらきは、見える形では来ない。『ここにあり』『あすこにある』と言えるものでもない。実に、神のはたらきはあなた達の〔現実〕の只中にある」と言われた。(ルカによる福音書一七章二〇節)

イエスは「神のはたらき」即ち、大いなる創造的な命のはたらき・たぎりは「来るとか来ないとか、また見えるとか見えないとか」という人間の認識や判断等に先立ち、また一切関係なく、あたたちの現実の只中で創造的に今も刻々とほたらき、滾っているのだ！」と証示なされた。言うならば、創造的な大いなる命のはたらきは、私達の善とか悪とか、罪とか、救いとか、さらに信仰があるとか無いとかに先立って、既に私達の足場で刻々、今、今、はたらき滾っているのである。さらに言うなら、聖書があるうが、無かるうが、イエスが存在してもしなくても、その命の滾りの事実は現実にはたらいている。まさに、この大いなる命のリアリティーは厳密な意味で人間にとって不可思議であり、絶対的な恩恵である故にイエスは「なんと幸いなことであろうか！」と感嘆したのである。

この大いなる創造的な命のはたらきについて、イエスは一つの譬えで証示なさる。

「イエスは言われた。神のはたらきは次のようなものである。人が土に種を蒔き、夜昼寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに（自然に）実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そして穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。」  
（マルコによる福音書四章二六節〜二九節）

ここでは多くを語らず、ただ一点、神のはたらき、つまり人間の一切のはたらきとは完全に断絶していることに注目していただきたい。種が成長して実を生み出す大いなる命のはたらきの場、即ち人間が成り立って来る場は、人の配慮以前であるということ、つまりこの大いなる命のリアリティーが、すべてに先立っており、人間はその先立ってたはたらいている命に限界付けられながら、そのまま、その場で生かされているということ、生きるようにされているのである。イエスが言う「幸い」はこの事実、現実にある。

人間が限界をもち、相対的な存在であるということは、そのまま、許されて有らしめられている「有り難さ」、自分自身で自分の身の居場所を持たず、迷えばなしで、うろう

ろし、喜んだり、悲しんだり、愛したり、憎んだり、誇ったり、落ち込んだりしているそのままで、大いなる命のはたらきの場につつまれ抱かれて生き死に出来るそこが、人間の居場所なのである。イエスはこのような人間の存在の隠れた命の秘儀を（天然自然を）自らの全存在をもって証示なされたのである。

山上の教えのなかで、次のようなイエスの証示がある。

「また、あなた方も聞いているとおおり、昔の人は、『偽りの誓いを立てるな、主に対して誓ったことは、必ず果たせ』と命じられている。しかし、わたしは言っておく、一切誓いを立ててはならない。天にかけて誓ってはならない。そこは神の玉座である。地にかけて誓ってはならない。そこは神の足台である。エルサレムにかけて誓ってはならない。そこは大王の都である。また、あなたの頭にかけて誓ってはならない。髪の毛一本すら、あなたは白くも黒くもできないからである。あなたは『然り、然り、否、否、』と言いなさい。それ以上のことは、悪いものから出るのである」（マタイ五章二三節〜三七節）

なんと明快な証示であろうか。イエスの語りは、**“ずとん！”**と無理なく私達のこころに入り、なにかそのこころを素直にし安心を促してくれる。



イエスはモーセの律法には「偽りの誓いを立てるな！。神にたいして誓ったことは、必ず果たせ！」と命じられているが、しかし、わたしは言っておく、一切誓うことはありません」といわれた。これは、神との関係でその律法（教え）を守らなければ、信仰人として人間として、神の前に正しく生きる義務をはたしていない、だから律法を遵守しなければ！と力み、努力する、その在り方にたいして語られたのである。

ここで、注目したいことは、イエスはモーセの律法を生きる根拠とはしておられない。

ということである。つまり、イエスは律法主義的生き方を突き抜けることで、律法を生み出した、大いなる命の芯に立つてものを見、語り、その命の芯を証示しておられるということである。だからイエスは「わたしが来たのは、律法や預言（教え）を廃止するためだと思つてはならない。廃止するためではなく、完成するためである……」（マタイ五章一七節以下）と言われた。しかし、モーセの律法の文字依存絶対排他主義に呪縛されたユダヤ教のセンセイ達には、イエスが何を証示しておられるのか、全く見えず、目で見える文字だけにしがみ着くことで、正統的信仰だと思ひ込み、そこから開放されることなくイエスのことを「あの男はベルゼブル（悪魔の頭）にとりつかれている」と非難した。

（マルコによる福音書三章二二節） それは当然イエスを殺害すべき悪魔と見なしたということであり、事実イエスは十字架刑で惨殺されることになる。人が一つの主義主張に囚われるとき、特に「宗教的な呪縛」は、人間を非人間化する。それは歪んだ自我が生み出

した一つの幻想にすぎないのだが。

その意味で、どのようなものに対してであれ、人が誓いや決意を元にして、それ自体により頼み、力み、熱烈になっても、それらは決して人間の生きる根拠にはならないのである。誤った宗教的熱烈信仰もその類である。ここで再び、エックハルトの言葉「(それがなにであれ)目に見える外面的な事物の内に平安を求めるような人たちは、すべて正しく求めてはいないのである。求めて遠くへ行けば行くほど、求めているものが益々見出し難くなるのである。道を間違った人のように、行けば行くほどますます迷う」。だか、そのように真実を語ったエックハルトは、当時のローマ・カトリック教会から異端者として告発され審問をうけるなか彼は命尽きたが、なおも審問はつづき異端者と決定された。

イエスの言葉の出所は、イエスが立っている大いなる命の滾り、はたらきその開けの場にある。それは、一口に言えば「天の然るところが自ずから然る」非閉鎖的で未完結的なスツカラカンのスツカラの命の滾りそのコトである。イエスはそこを「隠れたところ」と証示すされ、その「隠れたところ」が、私たちが生きている現場であると言われる。

イエスは「天は神の玉座であり、地は神の足台である」と言われた天も地も神の大いなる命のはたらきの場合、神の愛と恵みが充満しているのだ！と言われる。まさに、「神か

らはなれて人はなく、天にうらづけされない地上はない」のである。

この命の滾りのリアリティーを旧約聖書の詩編の記者は、たしかな霊の目で経験的に自覚していた。彼は次のように賛美する。

「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はその御手のわざを示す。その日、言葉のかの日につたえ、この夜、知識をかの夜におくる。語らず言わず、その声きこえざるに、その響きは全地にあまなく、その言葉は地のはてにまでおよぶ。(詩編一六)

その意味で、まさに福音の原音は、一千億の銀河系の開け、否、宇宙を突き抜けた開けに響きつづけているのである。私たちは、このとてつもないスッカラカンのスッカラカンの命に、ただただ、包まれ、抱かれ、存在(必ず成らせられる意)している、まさに、死んでも生きても神の中なる現実を、今、今、今、刻々と命しているのである。その意味で私たちが、もはや、なにおか言わんや、ただ、その大いなる命のはたらき滾りの中で「然り、否、否」と言うほかなく、その日々を、悩み、苦しみ、喜び、悲しみ、疑い、惑いながらもなお、絶対の安心に生きて行けるのである。

この絶対安心に開眼した者に於いては、力んで力まず、怒って怒らず、泣いて泣かず、

喜んで喜ばず、憎んで憎まず、笑って笑わず、生きていて生きておらず、死んでいて死んではおらず、愛して愛さず、信じて信じず、すべてに囚われてすべてに囚われず……この相対と絶対の現実世界の二重性の間を自らの居場所として生きられるのである。

このような大いなる命の現実に関眼するただ一つの道具（修道の具）は、「このころの貧しさ」だけである。それは、肉欲禁欲でもなく、理知的な内省でもなく、「霊に於いて空っぽになる」こと、つまり徹底的な「無一物」となること、徹底的に「自分を放下すること」を意味している。それは「自分を捨てる！」ではない。そうではなく「自分を開放しなさい」である。大いなる命のはたらきに開眼させていただくことである。

イエスは「先ず、神のはたらき、と、神の義の成就の確かさを願いなさい」（マタイ六章三三節）と言われた。つまり、このような願い心が、その者に起動するためには、その人の自我からは生じてはこない。それは「霊のはたらき」によるのである。つまり、霊的なはたらきに於いて、大いなる命に関眼するのであって、それが、神のはたらきと神の義への願い心を促すのである。その結果、こころが空っぽになることに開眼自覚する。その心が空っぽとは、禪的に言えば「無一物中無尽蔵」であり、また、道元的に言えば「放て

ば手にみたり」という事実の空っぽに開眼するのである。このことをイエスは次のように証示なされた。

「自分の命を得ようとする者は、それを失い、わたし（大いなる命）のために命を失う者は、それを得る」（マタイ一〇章三九節）

これは一般に「逆対応」と言われていることで、自我を滅すればそれに応じて自己（大いなる命）が増し、遂に、自我と自己とが一つになること、これを「真っ当な自我」と私は言っている。或る人はそれを「作用的」（八木誠一）と公表している。また、他の人は「対立の一致」（クザヌース）と言っている。

ここで一言、自我と自己とが一つになる、と言ったが、それは単なる神秘主義的できい一つではなく、わたしの自我が大いなる命のはたらきによって「更新される」ことである。先に、有賀鉄太郎氏の文章を紹介したが、そこでの「理性の更新」を「自我の更新」と解釈しなおしたのがそれであり、その自我の更新は人間の知力、意志力ではなく聖霊による更新の結果である。つまり「真っ当な自我」になることである。

「歪んだ自我」から「真っ当な自我」へ、という事態は、論理ではない。「聖霊によら

なければ、だれも『イエスは主である』と言えない」とパウロは言ったが、それ自体は正にそのとおりである。なぜなら、イエスは理性や感性や意志力での諒解を越えた奥義としての大いなる命の滾りの世界を、聖霊のはたらきにより証示なされたからである。

私たちは「歪んだ自我」に留まり、その自我が生み出す価値追求に余念がない。その結果、大いなる命に開眼する道を失い、人間性（じんかん性―人と人との豊かな交わり）が破壊され、個人の我欲の追求、人間中心の利益追求が、世界を混乱と破壊へと誘っているのが現代状況である。

ここある人達は、「なにかが、狂っている」とは感じていても、その狂いを脱却し、人間が人間らしく生きられる道を知らない。それは、見えるこの世だけに生きる拠り所を求めることしか知らないからである。「この世はこの世を越えた大いなる命によって、この世である現実」に気づいていないのである。肉の目、理知の目だけでは、この世の二重性の真実は見えない。人間が人間になるために「霊の目」を起動しなければならない。

「わたしは、あなたの行いを知っている。あなたが生きているとは名ばかりで、実は死んでいる。目を覚ませ！……見えるようになるために、目に塗る薬を買うがよい」（ヨハネ黙示録三章一節、二節、一八節）

「歪んだ自我」に留まっているかぎり「歪んだ自我」の悲惨さには気づくことはない。  
「歪んだ自我内」で、どれほど考え苦しむもがいても「歪んだ自我」から開放されること  
はない。

「歪んだ自我」からの開放は「歪んだ自我のそのまま」で、生かされている自分の有  
り難さに気づくときに自然に起こるのである。

自分が水の中にいて、渴きで苦しむのは、自分が既に水に包まれ、水に抱き抱えられて  
いる自分に気づいていないからである。大いなる命のはたらきの内に生かされている自分  
に気づくことなく、尚、水を自分の外にもとめようとするのが「歪んだ自我」の悲惨さで  
ある。

豊かで清らかな命の水の中に初めから無条件で生きるように在らしめられている自分の  
生の現実・真実（命のリァリテイ）に開眼させられるとき、一切の呪縛を突破し、ある  
がままの自分を安心して精一杯に生きよう！生きられるとい勇氣が自然に起動してくるの  
である。そのような自我意識が「真っ当な自我」というのである。そこが人間の居場所な  
のである。

大いなる命に開眼したパウロは「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう、この死の体から、誰がわたしを救ってくれるでしょうか」と歪んだ自我がもたらす生の悲惨に気づかされた。そして彼は歓喜して言う。「しかし今は、わたしたちは、自分を縛っていた律法（律法の文字に生きる根拠を置いていた自分）に対して死んだ者となり（完全に関係が無くなった者となり）律法から開放されています。その結果、律法の文字に従う古い生き方でなく『靈』の新しいものに隷属しています。」（ロマ・七章六節以下）

パウロは「死の体（歪んだ自我）」から真つ当な自我への新生は、ただ聖靈の働き（神の働き）によるという。パウロの場合それは、「主イエス・キリストの贖罪に於いての靈的救済である。勿論、イエス・キリストに於ける贖罪による救済解釈は、パウロに於いてそうであったように、深い意味をもっている。その意味で、私はそれを否定するつもりはない。だが、「宗教的救済の真理の主張が歴史的じじつの一回性あるいは、個別性と不可分な仕方ではなされる場合、そこから容易に排他的絶対性の主張や不寛容な態度が帰結し、さらに、人格的神との人格的關係として成立する宗教的な人格性も一種の自己中心性をを含むことになる。」

こうした自己中心性のために、キリスト教は自らのアガペー的隣人愛の契機を十分に發揮する事ができず、宗教戦争や異端迫害といった不寛容な精神性や選民意識から遂に脱却



出来なかつたのである。」と言う西谷啓治氏のキリスト教会にたいする指摘は、真摯にうけ留める必要があると思う。そのことを踏まえて、キリスト教会は『聖霊』のはたらきの問題、引いては「父・子・聖霊」に関わるそれを、内面的に突き抜ける事が現代のキリスト教が抱える最大の問題だとおもふ。私は一人の求道者、または伝道者として、この問題と直面し今日まで歩んで来た。これについては皆さんと分かち合う事ができたらと願っている。

これについて簡潔にここで述べるなら、イエスが神のはたらきの証示者として立っていたゆの根拠は、イエス以降に生み出された所謂「キリスト教」として閉鎖され、完結された教義（ドクマ）即ち聖霊や神や救済ではなく、それらはもっと非閉鎖的、未完結的な底無しの開けの大なる命の滾り、はたらきのそれであったということである。まさに、イエスは、その命のはたらきを生き行じ証示なされたのだと思う。

最後に、この大なる命の滾り、はたらきに開眼することの助けとなるであろうと思われる生き方の一つを提示して、この度のあごらの集いを終了したいと思う。

追記

清水…人格の成長

○ 神を愛し敬う。

○ 隣人の進歩を助ける。

○ 自分の体をいたわる。

○ 自分の心と靈の養いに配慮する。

○ 祈りと瞑想のときをもじ。